

## ナショナリズムと近代化への問い：比較社会学的視点から\*

亘 明 志\*\*

## The Questions about Nationalism and Modernization: From the Comparative Sociological Point of View

Akeshi Watari\*\*

## キーワード

ナショナリズム、グローバリゼーション、近代化、比較、分化的ナショナリズム

## 要旨

ナショナリズムはその主張する内容にもかかわらず近代の産物である。近代化は一方で人権の観念や科学技術、市場経済といった普遍主義的価値を生み出すとともに、個別主義的価値を称揚するかに見えるナショナリズムをも生み出した。現代社会におけるグローバリゼーションは普遍主義的価値を一層徹底させるが、ナショナリズムはそれに背反するかに見える。しかし、ナショナリズムとグローバリゼーションは実は深いところで密接な関連があり、時代とともにそのあり方も変貌している。グローバリゼーションはその多様性を通して個別主義的なナショナリズムを推進しているのである。社会の高度化とともにナショナリズムも分化しているように思われる。本稿では、近代社会が抱えてきたナショナリズムへのパラドクシカルな問いを素描する。

## 1. カレーのナショナリズム

カレーはいまや国民食と言っていいほど日本で普及している。しかし、よく観察してみると、カレーにもさまざまなカレーがあることがわかる。

日本にカレーが入ってきたのは幕末の頃、イギリスからだったという。イギリスのカレーは軍隊食だったようだ。横須賀海軍カレーはその流れを組むものだろう。イギリス風のカレーは小麦粉を使用してとろみをつけたもので、スパイスがメインのインド風カレーとは違う。

新宿中村屋のカリー（中村屋のメニューでは「カリー」ではなく「カリ」<sup>1</sup>と呼ばれている）は昭和の初めにインドから直接伝授されたものだ。いまでこそインド風カレーは珍しくないが、中村

屋の「カリ」は一味違ったカレーとして文化人などにも好まれた。それは次のようなエピソードとも深く関連している（中島岳志2005）。

インドがまだイギリスの植民地だった頃、独立運動に身を投じたラス・ビハリ・ボースという人物がいた。イギリス政府のお尋ね者となったボースは日本に亡命した。当時、日本はイギリスと同盟関係にあったから、日本政府はボースに国外退去を命じたが、民間にはボースの身の上を案ずる人たちがいた。独創的なパンや中華饅頭などの食品で知られていた新宿中村屋は、外国人の出入りも多く、ボースを匿うには格好の場所だった。中村屋を経営していた相馬愛蔵と黒光の夫婦は力を合わせてボースを支えた。やがてボースは相馬夫婦の娘俊子と愛し合うようになり、結婚する。

ボースは日本で普及していたカレーがインド式カレーとは程遠いことを嘆いていた。日本のカレーが敵対するイギリス風のカレーだったこともあるかもしれない。1927年（昭和2年）に中村屋の喫茶部が開設されたとき、インド式のカレーを紹介した。これが新宿中村屋のカリーライスの発祥である。

中村屋のカリーはそのスパイスに特徴がある。「辛い、甘い、すっぱい、すべての味がみなあって調和がとれたものが一番いい。舌ざわりは辛くなくて、食べたあとに辛味が舌に湧いて来るものでなくてはダメだ」というのがボースのカレー哲学だったようで、今でも中村屋のカリーにはそれが生きている。

ボースはインドの独立を目指していたという点で、ナショナリスト（民族主義者）に分類されるだろう。日本に亡命したナショナリストとしてのボースは否応なく当時の世界状況に直面することになる。日英同盟の誼から、日本政府はボースに国外退去を命ずるのだが、興味深いことに、ボースを中村屋に匿うのを仲介したのは、玄洋社の頭

\* Received January 31, 2009

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

山満であった。頭山満と言えば、日本の右翼ナショナリズムの源流と目される人物である。

ナショナリズムが自国の優位を主張する思想であるとするならば、異なるネーションのナショナリスト同士はそもそも協調できないはずである。冷戦という世界秩序が崩壊して以降、コソボ紛争を初めとして、ナショナリズムの噴出と民族浄化にまで至る激しい民族間対立を見ると、異なるネーションのナショナリスト間に和解の余地はないように思える。

しかし、19世紀末から20世紀初めにかけての植民地独立運動を中心としたナショナリスト間のネットワークはグローバルなものだった。19世紀後半、フィリピンの独立を志す若者たちはスペインに留学して、キューバの独立運動を知る。1895年、キューバのホセ・マルティがスペインに対して蜂起すると、翌年にはフィリピンでも独立戦争が開始された。同じ頃、南アフリカのボーア人たちは祖国を守るためにイギリスに抵抗する。日清戦争に敗北した中国の留学生たちは、アメリカ、アジア、アフリカと世界に広がるナショナリズムのうねりに強い影響を受けた。日本は東アジアにおけるナショナリストたちの連絡のかなめとなっていた。フィリピンの若い外交官だったマリアノ・ポンセは横浜で亡命中の孫文と出会い、お互いの闘いを支援し合うようになる。同じく日本に亡命していた梁啓超は、フィリピンの国民的英雄ホセ・リサルがスペイン政府によって処刑される前夜に書いた愛国詩を逸速く翻訳したという。一見すると語義矛盾のようだが、ナショナリストたちのインターナショナルなネットワークが成立していたのである。アンダーソンはこれを初期グローバリゼーションと呼んでいるが（梅森直之2007）、日本のナショナリストたちもこのようなネットワークの中にいた。

ボースから伝授された中村屋のカレーは、当時日本で普及していたイギリス風のカレーに対抗するナショナリズムのカレーという意味を帯びていた。しかし、親日家だったボースのナショナリズムは、その後、ずっと日本のナショナリズムと蜜月関係にあったわけではない。ボースは日本のナショナリズムが膨張主義的傾向を持っていることに対しては警戒感を持っていた。日本の朝鮮統治に関しても批判的だった。なぜなら、インドの独立を目指すボースにとっては、帝国主義的傾向を強める日本は、独立を妨害するイギリスと同じだったからである。

確かに、ボースはインドの独立を目指していた。しかし、彼は究極的には国民国家（ネーション）体制を超えた世界の中にこそ、インドの独立は位置づけられるべきであるという哲学を持っていた。アジアを植民地として支配するイギリスをはじめとする西洋諸国に対して、東洋精神を掲げるアジア主義である。それは西洋の物質主義に支配された近代社会を打破するものでなければならなかった。そこにボースのジレンマと落とし穴があった。ボースの理想は、日本の軍国主義を補完する役割を果たすことになったのである。

## 2. ナショナリズムと近代化

ナショナリズムと近代化の関係は両義的である。

近代化は普遍主義的価値をもたらした。たとえば、人権の観念や科学技術、国境にとらわれない市場経済などに普遍主義的価値は体现されている。これに対して、ナショナリズムは個別主義的価値に立脚しているように思われる。それは国境の内側にとどまり、その固有性にこだわるのである。ナショナリズムの言説はしばしば自らの起源を近代のはるか以前に遡る。にもかかわらず、それは近代において誕生したと考えられている。

ナショナリズムやネーションは、18世紀末から19世紀の冒頭にかけて、広義の西ヨーロッパで誕生した、というのが多くの研究者の結論である（大澤真幸2008 p.102）。それは近代化の進展とともに、19世紀を通じてますます高揚していった。

ナショナリズムが近代の産物であることを、構築主義的立場から徹底して明らかにしたのはアンダーソン（Anderson 1983, 1991, 2006）であった。アンダーソンは、ナショナリズムの概念を検討するにあたって、従来の議論が逢着していた三つのパラドックスについて述べている（Anderson [1983, 1991, 2006] 訳2007 p.22-23）。

その第一は、ナショナリズムが客観的には近代的現象であるにもかかわらず、主観的には（すなわちナショナリストの視点からは）きわめて古い存在に見えることである。また第二に、ナショナリティは誰もが特定の国民に帰属することになるという意味で形式的普遍性を持っているにもかかわらず、具体的にはつねに固有の存在、かけがえない独自の存在としてのみ現れる。そして第三に、ナショナリズムの政治的影響力の大きさに引き換え、その内実はまったく空虚なものだということである。

ナショナリズムは、それを実体化して一つのイ

デオロギーであるかのように扱おうとすると、まったく背反する二重の存在、それ自体パラドックスをもった存在に見えてくる。実際、ナショナリズムは歴史的にも二重の政治的機能を有していた。一方で、ナショナリズムは、自らを固有の存在とみなしながら、排外主義的、侵略主義的であり、異質な存在、自分より下位にあるとみなす存在に対しては、自らの普遍性を主張しつつ、相手の固有性を踏みにじっていくのである。しかし他方でそれは、より普遍的な存在、たとえば植民地宗主国のような存在にたいしては、自らの固有性、独自性を根拠にして、抵抗の原理ともなりうる。

ナショナリズムの実体視がもたらすパラドックスに対して、アンダーソンは、ナショナリズムを自由主義やファシズムといった特定のイデオロギーとしての主義主張ではなく、「親族」や「宗教」のような抽象的カテゴリーとして扱うべきだとする。そして、国民（ネーション）を、「イメージとして心に描かれた想像の政治的共同体」と定義するのである。ただし、その共同体は本来的に制限されており、主権的なものとして想像される。

アンダーソンは、ナショナリズムを想像の次元に位置づけることによって、それが土着的な共同体から切断された均質で空虚な時間と空間を前提にしてはじめて成立することを明らかにした。たしかにそれは、多くの新しい問題をも含む稔り豊かな次元ではあるが、だからといって、ナショナリズムの問題がはらんでいたパラドックスがすべて解消されたわけではない。問題は想像の次元に移行したのである。

では、ネーションという新しい共同体の想像を可能にしたものは何か。それは、アンダーソンによると、「生産システムと生産関係（資本主義）、コミュニケーション技術（印刷・出版）、そして人間の言語的多様性という宿命のあいだの、なかば偶然的、しかし、爆発的な相互作用であった」（Anderson [1983, 1991, 2006] 訳2006 p.82）。

印刷術の発明は、大量の複製を可能にするが、それだけではその可能性は現実のものとはならない。中国では、グーテンベルクよりも500年も前に印刷術が発明されていたにもかかわらず、ほとんど社会的影響力を持たなかった。印刷メディアの可能性、その潜勢力を引き出すためには、それが資本主義的な市場メカニズムのなかに置かれることが必要だったのである。

印刷・出版と資本主義との、ある意味では偶然的、しかし強力な結合は、アンダーソンによって

出版資本主義と呼ばれている。それは印刷物の大量生産を可能にし、また実際に促進したが、重要なことは、そのような量的な側面だけでなく、そこで自らについて考え、自己と他者とを関係づけることができるような、普遍化された均質な空間を準備したという点である。

たとえば、アンダーソンは出版資本主義という装置の効果として、小説と新聞の例を挙げている。小説の構造は、同時に進行するまったく別の出来事を、「この間（meanwhile）」という語で併置することを可能にした。それは、異質な出来事の共存を同時に眺めるという想像力の様式を提供する。新聞は、このような想像力の様式をさらに徹底するものであった。単に同じ日付というだけで、直接には何の関連性もない出来事が、同じ新聞に共存する。新聞は「一日だけのベストセラー」であり、関連性のない出来事が同時に存在する虚構の空間を、多数の人びとがこれまた同時に消費＝想像するのである。出版資本主義が均質で普遍的な空間を、想像の次元に提供したとしても、それだけではネーションの形成につながるわけではない。なぜなら、ネーションは、限定され、かつ不可分の主権的なものとならない限り、可能性にとどまり、現実化されないからである。土着的共同体から切り離された想像の次元は、ネーションの空間を形成するために必要であるが、十分ではなかった。資本主義が可能にした均質化された空間に楔が打ち込まれなければならなかったのである。

この点に関して、アンダーソンが重視しているのは、言語的多様性という宿命である。それは、資本主義に抗うものの一つである。出版資本主義は、言語的多様性という宿命に対して、普遍的でありながらある種の特異性を有するもの、すなわち出版語を挿入する。それは「ラテン語の下位、口語俗語の上位に、交換とコミュニケーションの統一的な場を創造した」（Anderson [1983, 1991, 2006] 訳 p.84）。出版語は、ひとつひとつの具体的な口語や本来の俗語とは異なり、普遍的存在でなければならない。そうでなければ、出版資本主義はその可能性を絶たれてしまうからである。しかし、同時にラテン語という特権的普遍性に対しては、その固有性を体現しなければならなかった。なぜなら、ラテン語に付与されていた特権性は、出版資本主義の展開にとって不要であり、余計なものだったし、乗り越えられるべき障害にすぎなかったからである。

ナショナリズムの起源とその展開に関するアン



ダーソンの議論、とりわけ資本主義、印刷・出版というコミュニケーション技術、言語的多様性という宿命性のあいだの相互作用については、個別化された主体化の装置としてのパノプティコンとは異なり、一層複雑ではあるが、可視性と不可視性の不均衡な仕掛けという点では共通する集団的主体化の装置として理解することができる。出版資本主義が生み出す読者たちは、相互に不可視であるが、書物に印刷された可視的な言語の形象を通して、不可視の共同体を想像することが可能になる。そしていったん想像の共同体の輪郭が形成されると、それは自分たちだけの、自分たちだけが理解し想像することができる唯一の共同体として意識される。それは、ナショナリズムが空虚であるがゆえに過剰であり、外部のない普遍性のゆえに特異な固有性として帰結せざるをえないことを理解させてくれる。

### 3. 比較概念としてのナショナリズム

ナショナリズム (Nationalism) は、日本語に訳すと、民族主義、国家主義、国民主義、あるいは国粋主義など、文脈やそれが適用される対象によって多様な訳語がありうる。ナショナリズムの語根であるネーション (Nation) という言葉自体、近代になって生まれたものであって、民族、国家、国民のいずれの意味も含む。それゆえ、ナショナリズムは、ただ単に「民族意識」や「国家意識」ということに尽きるものではない。

日本のナショナリズム把握の困難について、丸山眞男 (1964 pp.152-170) はその構成内容とその時間的な波動の特性の2点から述べている。

第一の構成内容の点では、日本のナショナリズムがフランスの共和主義やアメリカの民主主義といった政治的理念から出発したものではなく、またそれらの理念と結びつくことがなかったという意味で、アジア型のナショナリズムと共通の基盤を持っている。しかし、中国、インド、東南アジア等のナショナリズムのように独立運動の理念を体現するものでもなかったし、韓国のナショナリズムのように、民主化運動と結びつくこともなかった。また、戦前日本のウルトラ・ナショナリズムは、ナチズムのような大衆的基盤を持つこともなかったのである。

第二の時間的な波動の特性とは、日本の場合、1945年8月15日という顕著なピークを持っている。そのため、中国やインド、東南アジアではナショナリズムが独立運動と結びついてプラス・イメー

ジで捉えられるのに対して、日本ではナショナリズムが置かれた磁場は、ある意味で1945年8月15日を境にまったく異なったものとなっており、しばしば戦前への復帰としてマイナス・イメージで語られてきたのである。

アンダーソンがナショナリズムを近代の産物として構築主義的に捉えるとき土着的な共同体への即自的な愛着 (郷土愛) とは截然と区別される均質な空間の誕生が前提とされていた。しかし、日本のナショナリズムにおいては土着的なものに神格化された天皇制をかぶせることによって、均質な空間を人為的に作っていったと考えられる。その結果、西欧型ナショナリズムに対しては、土着的な共同体の残滓を残した遅れたナショナリズムであるかのように見え、他方では、アジア型ナショナリズムに対しては、逸速く近代化を遂げた進んだナショナリズムのように見えたのである。

日本のナショナリズムが特異な位置にあることは、近代化に対するナショナリズムの二重性、両義性を理解するひとつの手がかりになるだろう。ナショナリズムは近代化のもたらす普遍的な価値に背反するよう見えながらも、実質的には近代化の駆動力ともなってきた。その現れ方は多様であるが、ナショナリズム論の系譜においても、いくつかの類型的な把握が試みられている。ハンス・コーンによるいわゆる「コーン・ダイコトミー」は最もよく知られた類型のひとつであるが、「西」のナショナリズムと「東」のナショナリズムを対比する。政治的意志にもとづく「西」のナショナリズムとは、ドイツより西のナショナリズム、すなわちイギリス、フランス、アメリカを中心とした近代化の先進地域に見られるナショナリズムで、合理的かつ自由主義的なナショナリズムである。これに対して、ドイツ、ポーランド、ユーゴスラビア、ロシアなどの「東」のナショナリズムは、社会的・政治的發展の見られないまま、「西」のナショナリズムを表面的に受け入れるナショナリズムで、しばしば非合理的で排他的な傾向を示すとされる。

「コーン・ダイコトミー」をはじめナショナリズムの類型論には、価値判断が付着しているので、単純に適用することは危険ではあるが、「西」と「東」という空間的差異、地域差とともに、そこには近代化における時間的落差が隠されている。「東」のナショナリズムは遅れたものとされ、近代化が進んでいる「西」のナショナリズムに追いつくべきとされる。日本のナショナリズムに関し

ても、近代化の遅れと関連づけて説明されることが多い。

しかし、ここでできるだけ価値判断を脱色して、「近代化の遅れ」と見られてきたものをひとつの特徴と見たらどうだろうか。そうすると「ナショナリズム」や「近代化」は文化や社会を比較するための概念と考えられるのではないだろうか。それはときには「遅れ」と見られたものが、逆に「優位な特徴」と捉えられることもある。たとえば、「日本的経営論」は会社を共同体のようにとらえ、個人の独立が達成されておらず、「近代化の遅れ」に起因するものとされる。しかし、日本が著しい経済的高度成長を遂げた時期には、むしろ「日本的経営」こそ経済成長に適合的で優位に立つといった見解も出てくる。

日本のナショナリズム把握の困難さは、丸山眞男が述べたように、1945年8月15日をどのように位置づけるかという問題と密接にかかわっている。

第一の見解は、1945年8月15日を一種の革命とみなし、それ以前と以後では決定的に価値が異なると見る立場である。そこでは、ナショナリズムは戦前期のイデオロギーということになり、戦後は復古主義や保守反動でない限り、ナショナリズムとは無縁となる。この立場では、日本のナショナリズムはつねにマイナス・イメージとなる。

これに対して、第二の見解は、1945年8月15日の前後を連続したものにとらえる見解である。この見解は戦争期の捉え方をめぐって二つに分けられる。そのひとつは、戦争期の侵略的ナショナリズムを、日本の近代化過程における逸脱と考え、戦後デモクラシーを大正期のデモクラシーに接続するととらえる。しかし、この捉え方では、ナショナリズムと近代化の内的な関係を十分とらえることができない。

そこで山之内靖ほか（1995）は、戦争期の総力戦と国家総動員体制が近代化過程からの逸脱ではなく、むしろその徹底化であり、エリートのみならず大衆に至るまでナショナリズムが浸透したものであると考える。そしてその銃後の動員体制は戦後も継続しており、高度経済成長や福祉国家化をもたらした、と捉えることになる。この立場では、戦後のナショナリズムについては改めて説明しなければならないだろう。すなわち、戦争期の総動員体制におけるような顕在的なナショナリズムは、戦後は影を潜めることになるが、これをナショナリズムの後退や消滅ととらえ、1990年代後半以降登場した歴史修正主義的なナショナリズム

は、これまでのナショナリズムとはまったく連続性を持たない新たな言説と捉えるべきであろうか。それとも、ナショナリズムを戦後も継続したとされる経済的動員体制との密接な関連のもとに捉え、ナショナリズムは高度経済成長や福祉国家化の中に潜在化しただけである、と捉えたほうが妥当だろうか。

#### 4. 分化的ナショナリズムと現代社会

急速にグローバル化が進展する現代社会にあって、ナショナリズムはグローバリゼーションに対する個別主義的な抵抗にすぎないように見える。しかし、ロバートソン（Robertson 1992）によれば、そうした見方は表面的であるという。文化、特に宗教的要因を重視するロバートソンは、グローバリゼーションは世界を同質化したり、個別性を抹消したりするものではない、という。グローバリゼーション下におけるナショナリズム現象は、単なる抵抗ではなくて、ナショナリズムの個別性を通して、グローバリゼーションを実現しているのであり、それはむしろグローバルな多様性という形で、ナショナリズムの個別性を推進しているのである。

ロバートソンが言うように、グローバリゼーションが必ずしも同質化、画一化をもたらすものではなく、多様性に向けて開かれているのだとすれば、現代社会におけるナショナリズムのあり方をより微細に記述分析することが必要になってくる。

アンダーソンが分析した近代社会において誕生したナショナリズムは、一定の領域において均質な空間が成立することが前提条件であった。第一次世界大戦の直前、第二インターナショナルに集結した労働者たちは、階級的利害に基づくインターナショナリズムの立場から、戦争には反対していた。しかし、いざ戦争が始まると、労働者たちは階級的利害よりも自分の帰属意識、ナショナリズムの方を優先して、次々と戦争に参加していったのである。つまり、ナショナリズムが人を動かす力は、階級意識や階級的利害よりもある意味で強力だったことになる。ナショナリズムは、敵である「やつら（They）」やスケープゴートに対しては、残忍なまでに排外主義的であるが、「われわれ（We）」と呼ばれる間柄では階級差も身分差も越えて平等とされるのである。それゆえ、当該ナショナリズムが妥当する空間では、普遍的な力を持ちえた。

しかし、冷戦構造が崩壊して以降、それまでの

抑制が解除されて、局所的には度はずれたナショナリズムが噴出することがあるものの、広範かつ普遍的な駆動力を持ったナショナリズムは出現しにくくなったように思われる。それは、欧米や日本などの先進諸国において、強力な政治的な影響力を持つというよりは、文化の微細な領域と結びつき、空隙に浸透する分化的ナショナリズムに変貌しつつあるように見える。

日本においては、高度経済成長期やバブル期のように、経済的に高揚していた時期には、政治的ナショナリズムは影を潜める反面、しばしば経済的一体感（経済的ナショナリズム？）の表出が見られた。たとえば、それは「日本的経営の優位性」言説や「ジャパン・アズ・ナンバーワンという意識への共感」、あるいは経済最優先の「エコノミック・アニマル」といった行動パターンなどである。しかし、脱工業化が進行して社会が成熟し、経済的には低成長期に入っていくと、ある特定の価値観や言説が全面的に支配することはなくなってくる。経済的にも、第二次産業における大量生産大量消費から、第三次産業を中心とした多品種少量生産が求められるようになってくると、人々の嗜好も多様化し、大勢の人が一様なナショナリズムに捕捉されるというよりは、一部の人がマニアックに語る趣味的なナショナリズム言説が出現するようになる。

サッカーのワールドカップやオリンピックにおける国旗による応援といった「ぷちナショナリズム」（香山リカ 2002）のような趣味的なナショナリズムがあちこちに見られるようになる。それはときにフーリガンのような逸脱形態を生むこともあるが、政治的な統一勢力とはなりそうもない。また、1990年代後半以降、ネオリベリズム政策の下、次第に格差が拡大し、社会が流動化してくるにつれて、下層化した人々が「新しい歴史教科書をつくる会」や「嫌韓・嫌中」などのナショナリズム言説に「癒し」を求めるようになる（小熊英二・上野陽子 2003）。

こうした分化的な（differential）なナショナリズムの形態とともに、従来はナショナリズムからは排除される存在だったマイノリティがナショナリズムのシンボルを異化的に使用するケースも見られる。たとえば、バトラーとスピヴァク（Butler&Spivak 2007）が取り上げて議論している例では、2006年春に行われたアメリカ、ロスアンゼルスにおける不法滞在者たちの街頭デモにおいて、アメリカの国歌がまるでメキシコの国歌

であるかのようにスペイン語で歌われたというケースである。不法滞在者たちは排除される存在であり、本来ならナショナリズムの担い手とはならない。にもかかわらず、アメリカ国歌をスペイン語で歌うことによって表象しているものは何か。経済活動においても人の流れにおいても、国境を越える存在が大量に出現している現代社会において、それは旧来のナショナリズムの復活でも、また国歌を歌う自己の権利を主張するものでもなく、国家への帰属とは何かを問う営みなのではないだろうか。

（注）本稿は2006年度 地域総合研究所特別研究（A）の研究成果である。

### 【文献】

- Anderson, Benedict 1983 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso=1987  
白石隆・白石さや訳『想像の共同体ーナショナリズムの起源と流行』リブレポート → 1991 Revised Edition *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London and New York: Verso =1997 白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体』NTT出版 → 2006 Revised and Expanded Edition (newmaterial) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London and New York: Verso=2007 白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体』書籍工房早山
- Anderson, Benedict 1990 *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*, Cornell University Press: Ithaca
- Anderson, Benedict 1998 *The Spectre of Comparison: Nationalism, Southeast Asia, and the World*, London and New York: Verso=2005 糟谷啓介ほか訳『比較の亡霊ーナショナリズム・東南アジア・世界』作品社
- 浅羽通明 2004『ナショナリズム』筑摩書房
- Butler, Judith & Spivak, Gayatri Chakravorty 2007 *Who Sings the Nation-State ? : Language, Politics, Belonging*, Seagull Books London Limited.=2008 竹村和子訳『国家を歌うのは誰か？ グローバル・ステイトにおける言語・政治・帰属』岩波書店
- 同時代史学会【編】2006『日中韓ナショナリズム



の同時代史』日本経済評論社  
Hobsbawm, Eric & Ranger, Terence eds. 1983  
*The Invention of Tradition*, Cambridge  
University Press. =1992 前川啓二・梶原  
景昭ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店  
石坂浩一ほか 2005『東アジア 交錯するナショ  
ナリズム』社会評論社  
香山リカ 2002『ぶちナショナリズム症候群』中  
央公論新社  
キム・ジョンヨブ 2008「民主化と変化する民族  
アイデンティティ」日本社会学会・国際交流  
委員会編『第2回・日韓ジョイントパネル』  
第81回日本社会学会大会レジュメ  
北田暁大 2005『嗤う日本の「ナショナリズム」』  
日本放送出版協会  
李孝徳 1996『表象空間の近代』新曜社  
李建志 2008『日韓ナショナリズムの解体』筑摩  
書房  
中川敏 1996『モノ語りとしてのナショナリズム』  
金子書房  
中島岳志 2005『中村屋のボースーインド独立運  
動と近代日本のアジア主義』白水社  
丸山眞男 1964『増補版 現代政治の思想と行動』  
未来社  
小熊英二 1995『単一民族神話の起源』新曜社  
小熊英二 1998『〈日本人〉の境界』新曜社  
小熊英二 2002『〈民主〉と〈愛国〉』新曜社  
小熊英二 2008「有色の帝国－近代日本のナショ  
ナリズムの変遷－」日本社会学会・国際交流  
委員会編『第2回・日韓ジョイントパネル』  
第81回日本社会学会大会レジュメ  
小熊英二・上野陽子 2003『〈癒し〉のナショナ  
リズム』慶應義塾大学出版会  
大澤真幸 2007『ナショナリズムの由来』講談社  
大澤真幸編 2002『ナショナリズムの名著50』平  
凡社  
パク・ミンギョ 2008「現代韓国の民族言説の社  
会的分析」日本社会学会・国際交流委員会  
編『第2回・日韓ジョイントパネル』第81回  
日本社会学会大会レジュメ  
Robertson, Roland 1992 *Globalization: Social  
Theory and Global Culture*, London: Sage.  
=1997 阿部美哉訳『グローバリゼーション－  
地球文化の社会理論』東京大学出版会  
高原基彰 2006『不安型ナショナリズムの時代』  
洋泉社  
高原基彰 2008「1990年代以後における日本のナ

ショナリズムの変動－新自由主義と左右イデ  
オロギーの再編成－」日本社会学会・国際交  
流委員会編『第2回・日韓ジョイントパネル』  
第81回日本社会学会大会レジュメ  
上野千鶴子 1998『ナショナリズムとジェンダー』  
青土社  
梅森直之編著 2007『ベネディクト・アンダーソ  
ン グローバリゼーションを語る』光文社  
山之内靖／ヴィクター・コシュマン／成田龍一編  
1995『総力戦と現代化』柏書房  
吉野耕作 1997『文化ナショナリズムの社会学』  
名古屋大学出版会

